

第 II 群 座長のまとめ

旭川医科大学 耳鼻咽喉科

海野 徳 二

本群はエアロゾル療法を種々な面から捉えた基礎的な演題で、副鼻腔炎や気管支喘息の治療に、ネブライザー療法をどのように適用していくかの基本をなすものであった。

No.4の久松氏らの演題は演者の急病で欠演になったが、抄録を拝見すると、薬剤の pH 調整に着眼して、線毛運動に対する影響を観察したものであった。

No.5の吉山氏らは、以前からネブライザーに用いる薬剤の安定性、pH 等について研究し本研究会でも発表している。今回は特に浸透圧について調査した結果を報告された。現在ではネブライザー専用の薬剤は製品化されていないから、抗生剤、ステロイド剤、などを、自己の経験や学会・論文から得た知識等を基にして調合し、使用しているのが実状である。浸透圧が著しく変化すれば、それだけでも線毛運動に影響を及ぼし、粘膜上皮を通しての薬剤吸収も異なって来る。薬剤の性質を良く把握しておかないと、より良い drug delivery system と思ったことが逆効果にもなりかねない。溶液の混合や希釈液の追加による浸透圧の計算式も発表されたが、予測値と異なる実測値を示す例もあるようであり、安定性、pH などと共に研究を進められることを期待したい。また、このような問題を解決した上で作られた専用薬剤が望まれる。

No.6 和久田氏は、家兎副鼻腔炎モデルに対するネブライザー療法の効果を、組織学的に検討して発表した。副鼻腔炎治療の有効性をいかにして増加させるかについては、従来からいろいろと検討されて来たし、最も重要な課題の一つでもある。前演題の薬剤の選択もその一部ではあるが、ネブライザー機器の改良、圧付加も含めての使用方法の工夫、吸入前の鼻腔処置などもそうである。家兎の副鼻腔がヒトと構造的に異なるために、またモデルの副鼻腔炎症機序がヒトとは異なるために、圧付加の有無による組織学的有意差は証明されなかった。しかし、演者らも述べているように、副鼻腔との交通路が広いことが治療効果と密接に関係している。耳鼻咽喉科の専門処置としてのネブライザー療法という点からも、治療前の処置、自然孔開大手術など、準備の重要性を示唆する報告であった。

No.7 西沢氏の発表は、モルモットの気管支喘息モデルを用いて、BALF の検討をしたものである。継続的な研究であり、今回は、活性酸素産生促進因子に対する WP-871 の抑制効果を中心に発表した。O₂⁻などの活性酸素種の組織傷害作用が近年盛んに研究され、化学発光を用いた O₂⁻生成能の測定法も進歩している。一方、抗アレルギー剤も種々開発されているが、その作用機序に関して完全に解明されているわけではない。WP-871 の O₂⁻ の産生抑制効果と、LAR での O₂⁻ による組織傷害作用を関連づけた興味ある演題であった。